



Title	中古文学作品に見る男女の言葉について : 『枕草子』の日記的章段を中心に
Author(s)	鴻野, 知暁; ムスマン, デニース
Citation	日本語・日本文化研究. 2025, 35, p. 64-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103792
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中古文学作品に見る男女の言葉について—『枕草子』の日記的章段を中心に—

鴻野 知暁・ムスマン デニース

1. はじめに

Labov (1966) や Fishman (1972) などの先駆的な研究によって、言語学の分野で社会と言語の相関関係が注目されるようになった。言葉の使い方は、単に話し手自身が選択するといったものではなく、年齢や性別、社会階級、人間関係など、さまざまな要素に影響されるのである。これまで「女性語・女ことば」に関する数多くの著作が発表され、少なくとも現代日本語には性差が存在すると言われている。古代日本での男女の言葉の使用差についての研究も既に提示されているが、社会における思想・女性観や言語意識などの面から、性差と言葉との関わりを論じることが可能であろう。本研究は、中古文学作品における会話文中の言葉・表現を調査し、古代社会における女性観、男女の使う言葉の違い、男女が特徴的に用いる表現の内容について考え、その一端を明らかにする試みである。

2. 言語の規範・言語意識

中村桃子 (2007) は、「女ことば」を理解するにあたって、「女ことば」が女の実際に使ってきた言葉づかいから自然に成立したという本質主義・進化論的アプローチを退け (同書、p. 13)、「女ことば」は「言説」によって歴史的に構築されてきたという構築主義・イデオロギー的アプローチをとる (同書、p. 35)。後者の言説の古いものとして、中村氏は阿仏尼『庭のをしえ』(1283 年)、『めのとのさうし』(鎌倉末期)といった鎌倉時代の女訓書に書かれた教訓を挙げる (同書、pp. 44-46)。これらの女訓書では、女性の言語規範として、「女はこのように話すべきだ」「女はこのように話すべきではない」といったことが書かれており、社会的地位の高い人に読まれていた。これらの女訓書には中国の儒教思想の影響があると考えられ、具体的な教訓として、「あいまいにして感情を表さない、軽率に物を言わない、乱暴な口のきき方をしない」といったことが示されている (同書、pp. 44-46)。江戸時代になると、社会的地位の高い人のみならず、一般の女性にまで女訓書が流布した。特に『女重宝記』(1692 年)では、言葉遣いにおける男女の区別が明確に示され、漢語使用の禁止が説かれ、女性が使ってはならない言葉が具体的に挙げられている (同書、pp. 46-50)。

ここまで、中村桃子 (2007) に従って、鎌倉から江戸時代で「女ことば」を構築したと思われる言説について見てきた。中村桃子 (2007) ではこれより古い時代への言及はなされていないが、それでは、平安時代においてそのような言説は認められるであろうか。

特定の有名な言説が社会統制的に働いているわけではないものの、平安貴族のコミュニティの中では言語規範に近いような共通の意識があり、また、個々人でも言葉の使い方に反省的な意識を強く抱いていたということが、以下のエピソードや主張に認められる。

- (1) 女房あつまりて、（紫式部に向かって）「おまへ（＝紫式部）はかくおはすれば、御幸ひはすくなきなり。なでふをんなか真名書は読む。むかしは経読むをだに人は制しき」と、しりうごちいふを聞きはべるにも…

（『紫式部日記』＜26＞ p. 204）¹

- (2) この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。…御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、をととの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。

（『紫式部日記』＜26＞ p. 209）

(1)は、紫式部が女房に、漢籍を読むことを非難されているところである。(2)は非常によく知られたエピソードである。「式部の丞」（紫式部の弟）が漢籍を読んでいるとき、傍らで聞いていた紫式部の方がかえってそれを理解した。父は彼女が男子として生まれなかったことを嘆いたというのである。彼女はその後、「一といふ文字をだに書きわたしはべらず」というほどに、意識して、漢籍の才を隠すようになる。中宮に『白氏文集』を教えるときにもその態度は変わらないのである。ここでは、「漢籍を読む女性は好ましくない」とされ、（男性からだけではなく女性からも）陰口を叩かれており、少なくとも或る貴族ないしその周辺のコミュニティにおいては、このような共通の意識があったことが見て取れる。式部は、自分の使う言葉に反省的意識を向け、そのコミュニティの中での言語行動に気をつかい、漢字や漢語を知らないように振る舞うのである²。はっきりと形式化した特定の言説が存在するわけではないが、人の言葉の使い方を制限するような集団意識がここに確認されよう。

『枕草子』の随想的章段から、(3)・(4)の2例を挙げよう。

- (3) 長やかにうちあくびて、みそかにと思ひて言ふらめど、「あなわびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」と言ひたる、いみじう心づきなし。かの言ふ者は、ともかくもおぼえず、このみたる人こそ、をかしと見え聞えつる事も失するやうにおぼゆれ。

(『枕草子』<18> p.209, 第71段「懸想人にて来たるは」)

ここで清少納言は、愚痴を言う従者を無粋であると批評しており、その行動のせいで、面白いと見聞きしていたことも台無しになってしまう、と批評している。これは清少納言の個人的な感想だが、他者の言語行動に対して意識が向けられたものである。

- (4) ふと心おとりとかするものは 男も女もことばの文字いやしう使ひたるこそよろづの事よりまさりてわろけれ。ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらむ。さるは、かう思ふ人、ことにすぐれてもあらじかし。いづれをよしあしと知るにかは。されど、人をば知らじ、ただ心地にさおぼゆるなり。…何事を言ひても、「その事させんとす」「言はんとす」「何とせんとす」と言ふ「と」文字を失ひて、ただ「言はんずる」「里へ出でんずる」など言へば、やがていとわろし。まいて文に書いては、言ふべきにもあらず。物語などこそあしう書きなしつれば、言ふかひなく、作り人さへいとほしけれ。「ひてつ車に」と言ひし人もありき。「もとむ」といふ事を「みとむ」なんどはみな言ふめり。

(『枕草子』<18>p.324, 第186段「ふと心おとりとかするものは」)

この段は本文の異同が多くあるものの、清少納言の言語意識がよく示されている点で注目に値する。下品な言葉を使う人が批判されており、「何事を言ひても」以降は、清少納言がよくないと考える具体的な表現が列挙され、書き言葉と話し言葉との差にも意識が向けられている。ただし、この言語意識は「人をば知らじ、ただ心地にさおぼゆるなり。」という、あくまでも清少納言個人にとどまるものであると強調されていることに注意されたい。また、『枕草子』における清少納言の言語行動に関する考えは、女性だけではなく、男性も対象となっていることも付記しておく。

ここまで見てきたように、平安時代においても、(個人的に、あるいは、或るコミュニティの中で) 或る言語行動を不適切なものとみなす意識が存在していたことがわかる。女性の漢語使用をめぐる集団意識は、鎌倉時代以降のイデオロギーに連続するものであろう。

3. 平安時代の女性観とその表出

男女の使う言葉に関する意識以外の事柄に話を広げよう。平安時代社会で、男女の性差にまつわるどのような考え（女性観や男性観）があったのか、そしてそれはどのような言語表現や内容をともなって文学作品中に表出されているだろうか。

Pandey, Rajyashree (2016) は中世日本の文学や仏典に見られる「女性」の捉え方に関わるジェンダー (gender) と行為主体性 (agency) についての研究書である。「身体 (body)」・「女性 (woman)」・「ジェンダー」というカテゴリー—これらは西洋の哲学的・宗教的・フェミニスト的な議論から生まれたものである—を用いて中世日本の文学作品を理解することの可能性および限界を探究している。西洋の常識とは異なり、(古代の) 東洋では「身体」は心身が関わるプロセス (psychosomatic process) の元で認識され、「人が所有するもの (something one has)」というよりむしろ「行われるもの (something done)」とみなされている。古代の日本では、女性たちは生まれ持った性別ではなく、社会における地位や立場によって区別される。そして、恋愛関係という文脈においてのみ、男性と女性家族・血族関係や地位を抜きにした、ただの「男」と「女」として現れることが強調されている (同書、pp. 10-30)。

Pandey, Rajyashree (2016) は、「女性と仏教 (Women and Buddhism)」と題された節 (pp. 22-25) の中で、古い時代における「女の身 (*onna no mi*)」という表現は、単に「肉体的・性的な身体」を意味するだけではないという。同書によると、この表現は、精神的・感情的な性質や、社会的存在としての他人との関係性までも意味するのである。

Pandey 氏は「女の身」の古代語の用例を具体的には示していないが、古典文学作品を調べてみると、実際のところ、(単に「女」というのではなくて) ことさら「女の身」という表現を使う文脈には、当時の女性観や性差の意識が強く込められているようなのである。以下で具体的にそのことを見てみよう。

国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』 (以下、CHJ) 「平安時代編」の「平安-仮名文学」の作品を対象として、「女の身」もしくは「女の御身」という語連結を中納言で検索した³ところ、「女の身」4件、「女の御身」3件がヒットする。以下に全例を挙げる。

- (5) (翁) 「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門広くもなりはべる。いかでかさることなくてはおはせむ」。かぐや姫のいはく、「なんでふ、さることかしはべらむ」といへば、(翁) 「(あなたは) 変化の人といふとも、女の身持ちたまへり。翁の在らむかざりはかうてもいますかりなむかし。この人々の年月を経て、かうのみいましつつのたまふことを、思ひさだめて、一人一人にあひたてまつりたまひね」といへば…

(『竹取物語』 <12> p. 22)

(5)は、翁がかぐや姫に結婚を勧める場面である。翁は、たとえ「変化の人」であっても、「女の身」を持っているのだから、（言い寄ってきた人のうちの）一人と結婚しなさい、と言う。ここでは当時の社会において、男性と結婚すべき存在として求められる「女の身」が書かれている。

(6) 四の君、あさましういみじうなりて、ただ泣きに泣く。我（＝四の君）、<かかる者あらむ>とも知らぬに、かくつきづきしく言ひければ、あらがふべきかたなし。（母北の方）「蔵人の少将いかに思ひたまふらむ」と、（四の君）「女の身は心憂きものにこそありけれ」と泣けば、（北の方は）いふかひなし。

（『落窪物語』<17> p. 163）

(6)は、計略（少将のくわだてた復讐）によって、四の君が心ならずも兵部の少輔と結婚させられ、四の君が悲嘆にくれているところである⁴。四の君は中納言家という、少将の報復の対象となる「家」に属するが故に、その復讐の犠牲となる。しかも四の君は「女の身」であるからただ泣き寝入りするしかないというのである。女性の弱さが、男女の性別の対比の中で強調されている⁵。

(7) （朱雀院）「…なほたちまちふとうち聞きつけたるほどは、親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなき疵とおぼゆるわざなる。…」

（『源氏物語』<23> p. 34）

(7)では、親に知られず、しかるべき人が認めたわけでもないというような、自分勝手にひそかに決めた結婚は、「女の身」にとってこの上ない「疵（きず）」だと思われると言われている。ここでも(5)のように、社会的に結婚が求められる女性が話題となっており、しかもここで行われていることは、女性の結婚のあり方を制限するような内容であることが確認できる。

(8) かくさたするを聞きて、せうとなる人、「あはれ、男の身にてかくいはれまゐらせばや。うらやましくもおぼえさせたまふかな。女の御身にてさらでもありなん。故院の御時に、年ごろの人たち、御乳母子たちなどの賜りあはれし素服を、何ばかりの年ごろさぶらはせたまはざりしかど、賜らせたまふ、今の御時に、また、なほたいせちにいるべき人にて、月も待たず、『脱げ』と宣旨くだるも、あやし」などいひつづくるを聞くほどに、（作者である讃岐典侍は）あぢきなくはづかし。

（『讃岐典侍日記』<26> p. 432）

この例では、「男の身」と「女の御身」とが対比される形で述べられている⁶。「せうとなる人」は「『男の身』としてこのように白川院に言われたい（白川院から宣旨をいただきたい）。『女の御身』として、そこまで白川院に大切に思われなくてもよいだろうに」と、讃岐典侍のことをうらやむ。このような重用は女性には過ぎたものであるという性差意識が、発言の背後に存在している。

- (9) 中宮をあつかひきこえたまふさへぞ、このをりはものうく、言ひもてゆけば、女の身はみな同じ罪深きもとみぞかしと、なべての世の中いとはしく、かの、また、人も聞かざりし御仲の睦物語にすこし語り出でたまへりしことを言ひ出でたりしに、…
(『源氏物語』<23> p. 241)

(9)は明らかに仏教思想と関係するものであり、「女の身はみな同じ罪深きもとみぞかし（みな同じように、深い罪障を作る根源である）」と、女性に関する一般論として述べられている。(9)では「女人は往生することが難しい」、「女には五障がある⁷」という仏教思想の性差に関するイデオロギーが、「女の身」という表現に顕現している。(10)・(11)も類似の例である。

- (10) (横川の僧都) 「まだいと行く先遠げなる御ほどに、いかでか、ひたみちにしかは思したたむ。かへりて罪あることなり。思ひたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになん」とのたまへば、…
(『源氏物語』<25> p. 335)

- (11) (僧都) 「かたちを変へ、世を背きにきとおぼえたれど、髪、鬢を剃りたる法師だに、あやしき心は失せぬもあなり。まして女の御身はいかがあらん。いとほしく、罪得ぬべきわざにもあるべきかな」と、あぢきなく心乱れぬ。
(『源氏物語』<25>p. 379)

(10)は、「あなたのような女性が出家するというのはかえって罪を抱えることになる」として、横川の僧都が浮舟の出家を思いとどまらせているところである。悟りを得ようとする気持ちがいくら強くとも、年月が経つと女性の身であることから差し障りが生じる、というのである。(11)は僧都の心の内であって、「髪、鬢を剃った法師でさえもけしからぬ欲望⁸を捨てられない者もいると聞くが、まして、女の身であればどうであろうか。罪障を抱えることになるのではないか」と思い煩っている。

以上のように、「女の身」という表現が現れる文脈では、当時の社会意識・仏教思想に基づく、性別に関するイデオロギーが特に顕在化しているのである。

4. 男女が使用する言葉の言語学的分析

4.1 先行研究

平安文学において男女が使用する言葉の実態の分析にうつろう。本節では、石橋真理(1974)、森野宗明(1975)、山口仲美(1998a)、同(1998b)で述べられていること(特に本稿に関係すること)を整理する。

石橋真理(1974)は平安文学の会話文を対象に、語彙面における男女差を分析したものである。そもそも平安時代に男性語と女性語との間に差異があるかどうかということが問題として提起されている。『源氏物語』の一部の帖の会話文を資料として、①漢語の使用状況、②文末表現、③感動詞といった観点から、男女による言語の使用の違いを調査している。

石橋氏は②について下記のことを指摘している。まず、文末で疑問や反語の意を表す助詞(「や・やは」、「か・かは」)に関して、女性は「や・やは」と「か・かは」とを同程度に使用している。一方で、男性は「か・かは」よりも「や・やは」を多用する傾向がある。次に、感動を表す終助詞の使用に関して、男性は「かし」と「かな」とを同程度に使用するが、女性は「かし」より「かな」を多用していると報告されている。

感動詞については、「いざ系」を男性は用いるが、女性はそれをほとんど用いないという調査結果が提示され、「『いざ系』を男性が用いるのは、勧誘という積極的な意味のためであると考えられる」(同論文、p. 19)と述べられる。

最後に、石橋氏は「両性の生活態度、心情のちがいに起因する『言葉選び』の傾向」(同論文、p. 19)という広義の男女の言語差としては、「『源氏物語』会話文において、男性語と女性語の差はあると言えるであろう」(同論文、p. 19)と結論づけている。

森野宗明(1975)は、性別と言語表現との相関関係を踏まえて、平安時代の文学作品における「女らしさ」の発現について検討している。森野氏は、敬語が人物造形の巧みさとして見られることを指摘し、特に敬語の使用を避けることの意味について、繊細に考察を行っている。例えば、『源氏物語』で、弘微殿の太后と右大臣の発言では、光源氏に対する待遇に大きな差が見られる(敬語の使用に格差が見られる)。太后と右大臣はどちらも光源氏に対して悪感情を抱いている。しかし、右大臣は接頭語「み」や尊敬語「る」・「給ふ」といった軽いながらも最低限の敬意を示している一方で、太后は全く敬語を用いないこともある。このように太后は敬語を避けることによって、光源氏に対する嫌悪感を積極的に示していると主張される(同書、pp. 41-44)。この例は、聞き手との関係や聞き手に対する話者の評価・感情によって敬語が現れたり隠れたりし⁹、待遇度も異なることを示している。

森野氏は本書の第二章において平安文学における代名詞「まろ」の意識や使い方を詳細に考察し、女性によって使用される「まろ」は「親近感」を表すとされるところだが、「『まろ』の使用に、聞き手に対する遠慮が浅く、話し手が自己中心的に話しているという印象が付随しやすかったらしい」（同書、p. 65）ことや、微妙な感情的色彩を帯びる場合があることを主張している。続いて、代名詞「まろ」は男性語で、代名詞「ここ」は主に女性語であるという説に対して、「発言者の性別との相関のみをことさらに強調するのは、事実を誤る」（同書、p. 76）と注意を述べる。『源氏物語』だけでなく『枕草子』や『堤中納言物語』などの複数の作品の調査を通じて、代名詞「まろ」が女性にも活発に使われていたという可能性を指摘する（同書、p. 76）。

山口仲美氏による一連の研究は、平安時代における言葉の男女差を論じた、極めて重要なものである。

山口仲美（1998a）は、平安文学の『源氏物語』を精査し、男性特有語は容易に指摘できる一方、「女性特有語を見出すのは至難のわざである」（著作集 1、p. 430）という。語彙的につまり単語のレベルで女性特有と言えるものは、唯一、「乳母」を意味する「まま」であると述べられている。

山口仲美（1998b）は、語彙以外の面の、男女のコミュニケーションのとり方に目を向け、最も男女差が現れやすいと考えられる夫婦や恋人同士の会話場面を取りあげる。その中ではたして男女差が見られるかを追究している。まず、男性がイニシアチブを取って会話をリードする場面数は多いが、女性はいくつかの例外を除いてイニシアチブを取らないことが示されている（著作集 1、pp. 8-12）。「発言内容」に関して、『源氏物語』では、男性は「愛の告白表現」、「質問表現」、「弁解・事情説明表現」などを多用し、女性は「拒否表現」、「反論・異論表現」、「同意・同調表現」、「単純回答表現」などを多用することが、例とともに詳細に論じられている（著作集 1、pp. 13-51）。

4.2 調査方法

『枕草子』は、章段の内容によって「類聚的章段」「日記的章段」「随想的章段」の3つに分類でき、その内容には、平安時代の宮廷生活に加えて、清少納言による宮廷貴族との関係や人間像、美意識、生活観、男女関係など、さまざまなテーマについての見解が含まれている。本稿で主に取り扱うのは、清少納言と定子中宮とのやり取りや、男性貴族との交渉などを描いた「日記的章段」である。本稿は CHJ の検索結果から「会話」・「歌」¹⁰であるものを収集した（コーパスの「本文種別」の情報を参考とし、目視で確認した）。そこでの会話に出現する語彙・表現内容と性別との関係を分析した。具体的には、語彙レベルでは「感動詞の『いな』」、「自称表現」を取り上げ、先行研究での調査につなげつつ考察する。表現内容としては「親愛・好意に関する表現」、「親愛・信頼関係に基づく表現」、「褒め言葉」を取り上げ、山口氏とは少し異なった角度から見てみたい。

表1に参考として、『枕草子』中の主要人物（発言回数が10回以上）と、その発言回数とを載せる。

表1 『枕草子』における主要人物の発言回数

女性	清少納言	210
	定子皇后	123
	女房（たち）	77
男性	藤原伊周、藤原道隆	27
	藤原行成	25
	藤原齐信	21
	源宣方	20
	一条天皇	18
	平生昌	13

4.3 男女の使う語彙

4.3.1 感動詞の「いな」

石橋真理（1974）では、『源氏物語』に出現する感動詞について調査・分析が行われていた。『枕草子』の「日記的章段」における感動詞にはどのようなものがあるだろうか。CHJで「感動詞」として認定されているものを列挙すると、「あな 7/11、あなかま 0/1、いざ 4/3、いで 1/6、いな 1/2、おい 0/1、おし 1/0、やや 2/1」（数値は男/女の使用数）となっている。

以下、不同意や拒否を表す感動詞の「いな」を取り上げ、細かく見ることとする。先行研究では「否定を表現する時、女性は、否定をストレートに表わす『いな』を使用しない。『さあね』『いやどうも』という軽い否定を表わす『いで系』を使用している。」（石橋真理 1974:19）という指摘がなされている。ただし、石橋氏が調査したのは『源氏物語』の一部の帖であり、匂宮以降の帖（匂宮三帖および宇治十帖）は「成立に問題があるので除外する」（同論文、p. 13）とされる。山口仲美（1998b）で、女性多用表現の一つとして「拒否」が挙がっており、女性が拒否をする場面自体は多い。ただ、女性が拒否表現として「いな」を使用するかどうかは検討の余地がある。

『枕草子』の「日記的章段」での感動詞「いな」の使用状況は先に挙げたとおり、男性1回、女性2回である。女性の使用は両方とも中宮定子による（以下に挙げる）。（12）は「いなかへじ」という笛の名に掛けたものであり、通常の発話とは異なった性質のものである。

- (12) 宮の御前の、「いなかへじとおぼしたるものを」とのたまはせたる御けしきの、いみじうをかしきことぞ限りなき。

(『枕草子』<18> p. 176, 第 89 段「無名といふ琵琶」)

- (13) (清少納言)「されど、今はすさまじうなりにてはべりなり」と申す。(中宮が清少納言に対して)「すさみじかべき事か、いな」とのたまはせしかど、さてやみにき。

(『枕草子』<18> p. 191, 第 95 段「五月の御精進のほど」)

さらに、調査範囲を広げ、CHJ「平安時代編」の「平安-仮名文学」の作品を対象として、感動詞の「いな」を検索し、本文種別が「〇〇/会話」となっているものを会話主の男女別に整理した(表 2)。

表 2 CHJ 平安仮名文学作品における感動詞「いな」の例数

作品名	女	男	不明
竹取物語	1		1
大和物語	1		
平中物語	2		
落窪物語	2	3	
源氏物語	2	2	
堤中納言物語	1		
更級日記		1	
総計	9	6	1

表 3 は、先の表 2 の話し手が女性のものについて、さらに、誰への(=誰に対する)会話かを示したものである¹¹。

表 3 感動詞「いな」を含む会話の話し手と聞き手

作品名	誰から誰への会話か
竹取物語	かぐや姫→翁
大和物語	女→元夫
平中物語	女たち→男(もしくは女どうしの内輪話) 女たち→男
源氏物語	右近→少将という女房 女一の宮→女房
堤中納言物語	おほ上→不特定の人(独り言)

本表には『竹取物語』のように後世本文が改変されたとおぼしきものが含まれるが、平安仮名文学全体としては、感動詞の「いな」は「男性に限って使用される」とは言えないであろう。ただ、女性が「いな」を誰に対しても、無制限に使っているわけでもない。心やさしい女性に対して使う、もしくは、遠慮のいらぬ物言いのできる男性に対して使う、ということがおよそ言えそうである。「いな」は「否定をストレートに表わす」（石橋真理 1974:19）ために、女性による使用場面が上記のように限定されるのだ、と考えることができる。

4.3.2 自称表現

宮地裕（1973）は、『源氏物語』と『枕草子』の敬語全般を扱ったものであるが、その中で、対人呼称（自称・対称）について整理を行っている。そこでは、『源氏物語』における自称・対称が数値とともに表で示されている（同書、p. 96）。しかし、『枕草子』については、自称・対称として使われる語彙が示されているものの、各語彙の用例数は挙げられてはいない。そこで、本稿では『枕草子』の全章段について、自称表現を網羅的に調査した。

表4 『枕草子』（全章段）の自称表現

	自称の用法			自称以外の用法
	男性	女性	性別不明	
おの（が）	2	0	0	8
おのれ	1	0	1	4
なにがし	1	0	0	12
まま	0	0	0	0
まろ	5	4	1	0
みづから	0	1	0	5
われ	4	7	2	24
われら	0	1	0	0
わ（が）	5	11	0	21
【実名】	5	0	0	（省略）

表4は、男女別に自称表現の使用回数を示したものである¹²。同一の語が自称として使われるだけでなく、自称以外の用法を持つこともある（(14)は自称としての用法、(15)は不定称であり自称以外の用法）。自称以外の用法も参考として数値を示した（【実名】の、自称以外の用法の数値は省略）。

- (14) 「御返し、はや」とあれど、とみにも聞えたまはぬを、「なにがしが見はべれば、書きたまはぬなめり（＝私が見ていますので、書かれないのでしょうか）…」など申したまへば、…

（『枕草子』＜18＞ p. 205, 第 100 段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」）

- (15) 厨女の清げなるが、さし出でて、「なにがし殿の人や候ふ（＝誰々殿の御供の人はおひかえですか）」など言ふもをかし。

（『枕草子』＜18＞ p. 114, 第 58 段「よき家の中門あけて」）

「おの（が）」「みづから」「わ（が）」「われ」のように、自称と反照の用法を持つ語に関しては、当該文脈で話し手自身を指しているものを自称として扱った。(16)は地の文で、作者自身を指して「私の住むところ」と言っているととれるが、「自分の住むところ」と解釈することもできる。こういった例は自称代名詞として処理した。

- (16) せめておそろしきもの …近き隣に盗人の入りたる。わが住む所に来たるは、物もおぼえねば、何とも知らず。…

（『枕草子』＜18＞ p. 377, 第 246 段「せめておそろしきもの」）

表 4 から分かるように、自分を指す語として使用頻度が高いものは「われ」「わ（が）」「まろ」であり、これらの使用に男女差は特に認められない。「われ」「わ（が）」は(16)のように地の文でも使用されており、平安時代では自称として一般に使用されたものと考えられる。

以下では、実名を自称として用いる場合についてやや詳しく見る。実名を自称として用いるのは『源氏物語』にも見られ、『源氏物語』での使用については宮地裕（1973: 104）に「当時の実名敬避の慣習からか、あまり使用例はない。自称として使えば、身分の低い者から高い者（用例は源氏へのみ）への会話においてである（対称の場合はその逆）。」との指摘がある。本稿の筆者が見ても、『源氏物語』で女性が実名を自称に用いた例は見出しがたい（当時の常として、そもそも女性が実名を使うこと自体が無い）。他人からの呼称を自らを指すのに使用したものとして、「右近」（女性）が挙げられる¹³。(17)・(18)がその例¹⁴で、(17)は宮地裕（1973: 104）に例として挙がっている。(18)は周囲の女房に対しての言葉か、もしくは独り言に近いものかもしれない。

- (17) （右近が源氏に対して）「十九にやなりたまひけん。右近は、亡くなりける御乳母の捨ておきてはべりければ、三位の君のらうたがりたまひて、かの御あたり去らず生

ほし立てたまひしを思ひたまへ出づれば、いかでか世にはべらんとすらん。…」と聞こゆ。

(『源氏物語』<20> p. 187)

- (18) 女の心あはせたまふまじきことと推しはからるれば、(右近が)「げにいと見苦しきことにもはべるかな。右近はいかにか聞こえさせん。いま参りて、御前にこそは忍びて聞こえさせめ」とて立つを、あさましくかたはに誰も誰も思へど…

(『源氏物語』<25> p. 63)

『枕草子』について見てみると、自分を指すのに「実名」を用いるのはやはり男性に限られている。以下がその全例である。

- (19) (方弘が人々に対し)「やや、方弘がきたなきものぞ」とて、いとどさわがる。

(『枕草子』<18> p. 112, 第54段「殿上の名対面こそ」)

- (20) 僧都の君(僧都の君である隆円が淑景舎に対し)「それは隆円に給へ。おのがもとにめでたき琴はべり。それにかへさせたまへ」と申したまふを聞きも入れたまはで、…

(『枕草子』<18> p. 176, 第89段「無名という琵琶」)

- (21) 中納言まゐりたまひて、御扇(中宮に)奉らせたまふに、(隆家が中宮に対し)「隆家こそいみじき骨は得てはべれ。それを、張らせてまゐらせむとするに、おぼろけの紙はえ張るまじければ、もとめはべるなり」と申したまふ。

(『枕草子』<18> p. 196, 第98段「中納言まゐりたまひて」)

- (22) (清少納言)「さては扇のにはあらで、くらげのななり」と聞ゆれば、(隆家が清少納言に対し)「これは隆家がことにしてむ」とて、笑ひたまふ。

(『枕草子』<18> p. 196, 第98段「中納言まゐりたまひて」)

- (23) (信経が清少納言に対し)「…信経が足がたのことを申さざらましかば、えのたまはざらまし」と、かへすがへす言ひしこそをかしかりしか。

(『枕草子』<18> p. 197, 第99段「雨のうちはへ降るころ」)

(22)では、貴人男性が(他の人もいる中で)清少納言に対して自称として実名を使用している。つまり、『枕草子』では自分より身分の低い、女性に対しても当該用法が使用されているということであり、先の引用にある宮地裕(1973: 104)で報告された『源氏物語』での使用実態は、『枕草子』での使用実態とは異なる面があると言える。

4.4 男女の発言内容

本節では、山口仲美(1998b)を参考とし、コミュニケーション(人と人とのやり取り)の面に目を向け、『枕草子』の「日記的章段」における男女の発言内容を分析する。ただ

し、本稿では、たとえば「要求表現」の背後にどのような心理・人間関係が存在するかといったことも考慮に入れるため、山口仲美（1998b）での分類とは異なる面がある。今、試みとして、「親愛・好意を表す表現」、「親愛・信頼関係に基づく表現」、「褒めに関する表現」に着目してみたい。

4.4.1 親愛・好意を表す表現

山口仲美（1998b）では、『源氏物語』において男性が多用する表現の1つの典型として、「愛の告白」が挙げられている。『枕草子』の「日記的章段」においては、戯れに近いものも含まれるものの、男性が女性（特に清少納言）に対して好意や親愛の情を示す例がいくつか見られる。

(24) わざと呼びも出で、会ふ所ごとにては、（藤原齊信）「などかまろをまことに近く語らひたまはぬ。さすがにくしと思ひたるにはあらずと知りたるを、いとあやしくなむおぼゆる。かばかり年ごろになりぬる得意の、うとくてやむはなし。殿上などに、明け暮れなきをりもあらば、何事をか思ひ出でにせむ」とのたまへば、（清少納言）「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり。上の御前などにても、やくとあづかりてほめきこゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出で来て、言ひにくくなりなむ」と言へば、…

（『枕草子』<18>p.243, 第129段「故殿の御ために、月ごとの十日」）

(24)の「近く語らひ」というのは、「親しく交際する」といった意であるが、二人の会話全体としては恋愛を真剣に取り沙汰したものではなく、清少納言特有の当意即妙な返し（「もしもそのように親しくなってしまったのなら、あなたのことをお褒め申し上げることができなくなるのが残念ですので…」という婉曲的な断り）が注目すべきところである。清少納言自身、男女の機微・やり取りの面白さを書き残したかったのであろう。

第130段では、清少納言に、親愛の情を示す複数の男性が書かれている。以下、第130段の一部を(25)-(27)に分けて引く。

(25) （頭弁）つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、「今日は、残りおほかる心地なむする。夜をとほして、昔物語も聞え明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ」と、いみじう言おほく書きたまへる、いとめでたし。

（『枕草子』<18> p. 244, 第130段「頭弁の、職にまゐりたまひて」）

「今日は、残りおほかる心地なむする。…」とあるのは、頭弁である藤原行成が、清少納言らと夜更けまで「物語」をした翌朝に送ってきた手紙の内容であり、行成からの深い親愛が感じられる。

(26)（清少納言が頭弁に対して）

「夜をこめて鳥のそら音にはかるとも世に逢坂の関はゆるさじ
心かしこき関守侍り」と聞ゆ。また、立ち返り、

（頭弁が清少納言に対して）

「逢坂は人越えやすき関なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか」
とありし文どもを、…

（『枕草子』<18> p. 245, 第130段「頭弁の、職にまゐりたまひて」）

(26)は頭弁と清少納言との歌のやり取りである。恋愛関係を育んでいく男女のそぶりをし
て、お互いが受け答えを楽しんでいる。清少納言は当時の女性の常として、言い寄ってきた
相手と距離を取ろうとする。対して、頭弁は「逢坂は人越えやすき関なれば…」（その
「逢坂の関」は越えやすいものですから…）と返す。恋の駆け引きを模した知的応酬であ
るが、このような戯れを許すほどに、二人の間に深い信頼関係があることが見て取れよう。

(27) 経房の中将おはして、「頭弁は（あなた、すなわち清少納言のことを）いみじうほめ
たまふとは知りたりや。一日の文に、ありし事など語りたまふ。思ふ人の、人にほめ
らるるは、いみじううれしき」など、まめまめしうのたまふもをかし。（清少納言）
「うれしき事二つにて、かの（＝頭弁が）ほめたまふなるに、また、思ふ人の中に侍
りけるをなむ」と言へば、（経房の中将）「それ、めづらしう、今の事のやうにもよ
ろこびたまふかな」などのたまふ。

（『枕草子』<18> p. 246, 第130段「頭弁の、職にまゐりたまひて」）

(27)は、その後の源経房と清少納言との会話である。中に、「思ふ人」という表現が使わ
れているが、現代でいう「思い人」に近い。経房の中将から親愛の情を告げられた清少納
言が、「うれしき事二つ」（頭弁に褒められたことと、経房の中将の「思ふ人」の中には
いっていたこと）として、男性二人からの「褒め」を受け止め、彼ら二人に配慮をしつつ、
うまく結んでいる。

見てきたように、異性間での親愛・好意に関する表現は、男性から女性に対して多く用
いられる。逆に、女性から男性に対して、求婚の類いの、真剣な愛の告白がなされること
は平安時代の文学作品にはなかなか認めがたく¹⁵、当時の貴族社会の常であったと思われ
る。

4.4.2 親愛・信頼関係に基づく表現

前述のとおり、山口仲美（1998b）は、男女の言語差（語彙面ではなく、表現の仕方・表現内容）を追究するという目的の下で、男女差が現れやすいと考えられる「夫婦や恋人同士の会話場面」を扱ったものである。そのため、同書では同性間での会話は取り上げられていない。『枕草子』での女性同士—具体的には清少納言と、中宮定子—の会話文を見ても、親愛が直接的に表明されないとしても、その背景に両者の親愛・信頼関係が存在する、つまり両者の親愛・信頼関係に基づく会話と認められるやり取りが多々ある。以下で、いくつかを見てみることにする。最もよく知られたものの一つは次のエピソードであろう。

- (28) (中宮定子が清少納言に) 物を投げ給はせたる、あけて見たれば、「思ふべしやいなや。人、第一ならずはいかに」と書かせたまへり。御前にて物語などするついでにも、(清少納言)「すべて人に一に思はれずは、何にかはせむ。ただいみじうなかなかにくまれ、あしうせられてあらむ。二、三にては死ぬともあらじ。一にてをあらむ」など言へば、「一乗の法ななり」など人々も笑ふ事の筋なめり。筆、紙など給はせたれば、(清少納言)「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書いてまゐらせたれば、(中宮)「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。…」とのたまはす。…(中宮)「…第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるるいとをかし。

(『枕草子』<18> p. 195, 第 97 段「御方々、君達、上人など、御前に」)

以前御前で「人に一番に思われなくてはなんになろうか」と言ったことのある清少納言が、「思ふべしやいなや。人、第一ならずはいかに（あなたのことを大切に思おうか、どうか。第一の人でないならばどう思うのか）」と、中宮から問われる。清少納言はここでは遠慮して「下品といふとも（＝下品のような、下の方でもよろしゅうございます）」と答えるが、中宮は「第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ（第一の人である私に、また一番大切な存在に思われようとするのがよいであろう）」と言う。最後の中宮の発言は、表面的には勧めの表現と見られるが、その背後には、中宮の「第一の人」としての自負、そして、中宮から清少納言への愛情が存するのである。

- (29) さて（清少納言が）八、九日のほどにまかづるを、(中宮)「いますこし近うなりてを」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる昼つ方、(中宮)「花の心ひらけざるや。いかに、いかに」とのたまはせられたれば、(清少納言)「秋はいまだしく侍れど、夜に九度のぼる心地なむしはべる」と聞えさせつ。

(『枕草子』<18> p. 402, 第 260 段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」)

里に下がった清少納言に、中宮が『白氏文集』の「長相思」を踏まえつつ帰参を要求する場面である。清少納言も同詩を踏まえて、機知に富んだ返しをする。この二人の会話の裏には、清少納言が側にいることを求める中宮の思いと、それに応じる清少納言の敬愛がある。

- (30) そのころ、(清少納言が) また同じ物忌しに、さやうの所に出で来るに、二日といふ日の昼つ方、いとおれづれまさりて、ただ今もまゐりぬべき心地するほどにしも、(中宮の) 仰せ言のあれば、いとおれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書いたまへり。

(中宮) 「いかにして過ぎにし方を過ぐしけむ暮らしわづらふ昨日今日かなとなむ。わたくしには、今日しも千歳の心地するに、暁にはとく」とあり。

(『枕草子』<18> p. 435, 第282段「三月ばかり物忌しにとて」)

これも先の例と似たもので、物忌みで別所に退出している清少納言に、中宮は歌を送り、宰相の君も「暁にはとく」と参内を求めるのである。

ここまで見てきたように、二人の親密なやり取りは折に触れてなされ、主従関係を越えた親愛・信頼関係が現在の我々の感動を誘うものとなっている。

4.4.3 褒めに関する表現

先に、(27)に挙げた例では、既に褒めに関わる会話が認められた(ここでは、男性が女性を褒めている)。褒めの表現は、どの立場・性別の人が、どのように使用するのだろうか。

まずは、男性が女性に対して褒めに関わる発言をしている例を見よう。

- (31) 修理亮則光、「いみじきよろこび申しになむ、上にやとてまゐりたりつる」と言へば、…(橘則光)「いな、まことにいみじううれしき事の夜べ侍りしを、心もとなく思ひ明かしてなむ。かばかり面目ある事なかりき」とて、…(橘則光)「『ただ、この返事にしたがひて、こかけをしふみし、すべてさる者ありきとだに思はじ』と、頭中将のたまへば、ある限りかうようしてやりたまひしに、ただに來たりしは、なかなかよかりき。持て來たりしたびは、いかならむと胸つぶれて、まことにわるからむは、せうと(=則光)のためにもわるかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず、そこらの人のほめ感じて、『せうと(=則光に対して)こち來。これ聞け』とのたまひしかば、…これは、身のため人のためにも、いみじきよろこびにはべらずや。司召に少々の司得てはべらむは、何ともおぼゆまじくなむ」と言へば、…

(『枕草子』<18> p. 138, 第 78 段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」)

ここに引用した箇所少し前の部分を説明する。藤原齊信が清少納言を試すために「蘭省花時錦帳下」と書いて送り、下の句を求めた。それに対して、清少納言は機転を利かして返事をする。齊信はいたく感心し、清少納言は「行く先も、語りつたふべき事なりなどなむみな定めし」とまで称賛される。上に引用したのはこれに続く場面で、橘則光(清少納言の元夫)が、「いみじきよろこび(祝いの言葉)」を言うために清少納言のいる上の局に参上した。「そらの人のほめ感じて」いたのを、則光は「これは、身のため(=私、則光にとっても)人のためにも(=あなた、清少納言にとっても)、いみじきよろこびにはべらずや」と、我が事のように喜び、賛美している。

次の例は、男性(源忠隆)が女性(清少納言)に対して間接的な「褒め」の行為をしていると考えられるものである。

(32) (清少納言が詠んだ歌)

ここにのみめづらしと見る雪の山ところどころに降りにけるかな
と(清少納言が)かたはらなる人して言はすれば、(忠隆が)たびたびかたぶきて、
「返しは、つかうまつりけがさじ。あされたり。御簾の前にて人にを語りはべらむ」
とて立ちにき。

(『枕草子』<18> p. 156, 第 83 段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」)

忠隆は、せっかくの見事な歌を汚しそうでよくない、ということで、あえて返歌をせずに立ち去ったのである。「御簾の前にて人にを語りはべらむ」について、新編全集の頭注に「返歌をするのではなく、作者からの歌をめぐる話を人に語る、という形で作者の歌を評価する。」とある。

(33) (藤原道隆が) (中宮定子の) 御前にみさせたまひて、物など聞えさせたまふ。(中宮の) 御いらへなどのあらまほしさを里なる人などにはつかに見せばやと見たてまつる。(道隆が) 女房など御覧じわたして、「宮、何事をおぼしめすらむ。ここらめでたき人々を据ゑ並めて御覧ずるこそは、うらやましけれ。一人わるきかたちなしや。これみな家々のむすめどもぞかし。あはれなり。ようかへりみてこそ、候はせたまはめ。…」などのたまふがをかしければ、(女房たちが) 笑ひぬれば、(道隆) 「まことぞ。をかなりと見てかく笑ひいまするが、はづかし」などのたまはするほどに、内より式部丞なにがしまりたり。

(『枕草子』<18> p. 396, 第 260 段「関白殿、二月二十一日に、法興院の」)

道隆は、娘定子の返事の仕方を「里なる人¹⁶」に見せたいものだ（それほどに素晴らしい）と思う。道隆の称赞は定子にとどまらない。下線部にあるように「宮（定子）が、これほど素晴らしい人々を並べて座らせて御覧になっているのは、うらやましいね」と愛情を込めて女房を褒めるのである。

ここまで、男性が女性への褒めの言葉を見てきた。それでは、女性が褒めの表現を使う例に目を向けよう。もちろん、『枕草子』の地の文では、作者から貴人について賞讃を述べるころが多々見られる。中宮に対してのものを、下にいくつか挙げる。

- (34) 宮の御前の、『いなかへじとおぼしたるものを』とのたまはせたる御けしきの、いみじうをかしきことぞ限りなき。

（『枕草子』<18> p. 176, 第89段「無名といふ琵琶」）

- (35) 宮の御前の、御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへるなど、何となく、ただめでたきを、候ふ人も、思ふことなき心地するに、…

（『枕草子』<18> p. 50, 第21段「清涼殿の丑寅の隅の」）

- (36) 淑景舎の、いとうつくしげに絵にかいたるやうにてみさせたまへるに、宮はいとやすらかに、いますこし大人びさせたまへる御けしきの、紅の御衣にひかり合はせたまへる、なほたぐひはいかでか見えさせたまふ。

（『枕草子』<18> p. 202, 第100段「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」）

それでは、会話文において、女性が誰かを褒めるということはどのような時になされるであろうか。

- (37) （中宮定子）「この事どもよりは、昼斉信がまゐりたりつるを（あなた、清少納言が）見ましかば、いかにめでまどはましとこそおぼえつれ」と仰せらるるに

（『枕草子』<18> p. 144, 第79段「返る年の二月二十余日」）

中宮と女房とが集まって、物語の良し悪しを言い合っている場面である。『宇津保物語』の「涼」・「仲忠」の優劣が論評された後に、この引用部が続く。定子によって「この事ども（＝宇津保物語の人物）」から現実世界の「斉信」へと話が転じられ、「あなた（＝清少納言）がもしもこの昼に斉信を見たのなら、どんなに素晴らしいと大騒ぎして褒めただろうか」と言われる。ここで、斉信が褒められているのであるが、斉信はその場にはいないということに注意されたい。つまり、斉信を聞き手として褒めの言葉を直接向けているわけではなく、第三者を話題としての褒めなのである。

(38) 添へたる立て文には、解文のやうにて、

進上餅餠一包例に依て進上如件別当 少納言殿

とて、月日書きて、「みまなのなりゆき」とて、奥に、「この男はみづからまゐらむとするを、昼はかたちわろしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。御前にまゐりて（中宮に）御覧ぜさせれば、「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文は取らせたまひつ。

（『枕草子』<18> p. 238, 第 127 段「二月、官の司に」）

中宮が藤原行成（ここで「みまなのなりゆき」とされている）の立て文を褒めているところであるが、先ほどの例と同じく、当事者がその場にいるわけではない。

これまでの例の、男性による褒めと女性による褒めとを比較すると、褒められる対象がその場にいるかないかといった差がある。女性が人前で、聞き手（特に男性）に対して直接に褒めの言葉を投げかけるということは、この時代避けられたのではないかと推測される。現代の日本でも、人を褒めることは人を評価することであるから、目上の者に向かって褒めるということ是不適当であるという考えがある。古代で、女性が男性に向かって直接褒めた例が見出しがたいのは、これと類似したことであつて、女性が男性に評価に与えるという行為が不適当であるという社会意識があつたのかもしれない。

人が人を褒めるということには、両者の人間関係が深く関わっているということをうかがわせる話が『枕草子』の中に見られる。

まず、(39)の随筆的章段では、清少納言の、「褒め」の行為に対する意識が述べられている。身分の低いものが身分の高いものを褒めることは、かえって褒められた者の品位を落とすのであつて、むしろけなされる方が良いというのである。ただし、ここには、清少納言特有の、「下衆」に対する冷徹さも含まれていよう。

(39) よろしき男を、下衆女などのほめて、「いみじうなつかしうおはします」など言へば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるるは、なかなかよし。下衆にほめらるるは、女だにいとわろし。…

（『枕草子』<18> p. 444, 第 291 段「よろしき男を、下衆女などのほめて」）

次に、先の例(24)で、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、えほめたてまつらざらむが、くちをしきなり（＝もしあなたと親しい仲になってしまったのなら、褒め申し上げることができなくなるのが、残念です）。」とあつたとおり、身内のことを人前で褒める、ということは避けられたと見られる。現代日本人の感覚からしても首肯できるところである。

5. おわりに

本稿では、平安時代の男と女の言葉に関して、先行研究から着想を得て、また、先行研究で示されたことを広げていく形で複数の観点から考察を行ってみた。関心のあるところをピックアップしての論考となったが、全体として、平安時代には「女性はこのような言葉を使い、このような表現を進んですべきだ」といった言語意識よりも「女性はこのような言葉づかいを避け、このような表現は慎むべきだ」といった言語意識の方が多く存在していたのではないか、という感じを抱いている。

文学作品によって、男女の置かれた立場や両者の関係性には様々なものがあり、それらを含めて考えることで、より一層言葉の使用実態の解明を行っていきたい。

参考文献

- 石橋真理(1974)「『源氏物語』会話文における男性語と女性語」『成蹊国文』8 [pp. 13-19].
- 中村桃子(2007)『「女ことば」はつくられる』ひつじ書房.
- 森野宗明(1975)『王朝貴族社会の女性と言語』有精堂出版.
- 森野宗明(1991)「女性語の歴史」(辻村敏樹編『講座日本語と日本語教育 10 日本語の歴史』明治書院) [pp. 225-248].
- 宮地裕(1973)「源氏物語・枕草子の敬語」(林四郎・南不二男編『敬語講座 第2巻 上代・中古の敬語』明治書院) [pp. 73-115].
- 山口仲美(1998a)「『源氏物語』の女性語」『平安朝の言葉と文体』風間書房. 『山口仲美著作集1 言葉から迫る平安文学1 源氏物語』(2018年、風間書房)に同タイトルで収録. 本稿での引用は著作集による.
- 山口仲美(1998b)「源氏物語の「男の表現」・「女の表現」」『源氏物語の表現と文体 上(源氏物語研究集成第3巻)』風間書房. 『山口仲美著作集1 言葉から迫る平安文学1 源氏物語』(2018年、風間書房)に「男の表現・女の表現」のタイトルで収録. 本稿での引用は著作集による.
- Fishman, Joshua A. (1972). *The Sociology of Language: An Interdisciplinary Social Science Approach to Language in Society*. Rowley, Mass.: Newbury House Publishers.
- Labov, William. (1966). *The Social Stratification of English in New York City*. Washington DC: Center for Applied Linguistics.
- Pandey, Rajyashree. (2016). *Perfumed Sleeves and Tangled Hair: Body, Woman, and Desire in Medieval Japanese Narratives*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

参考 URL

国立国語研究所（2023）『日本語歴史コーパス 平安時代編 I 仮名文学』
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/heian.html#kanabungaku>（2025年10月31日確認）

付記

本稿は、国立国語研究所「通時コーパス」プロジェクトによる研究成果の一部である。

本稿の執筆の分担は以下のとおりである。1 節は鴻野とムスマンが協議の上執筆した。2 節と 4.1 節はムスマンが中心となって執筆し、鴻野が加筆・修正した。3 節は鴻野が執筆した。4.2 節以降は基礎的な調査をムスマンが行い、鴻野が精査の上で執筆した。

¹ 以下、引用は小学館の新編日本古典文学全集による。巻次とページ数を示した。『枕草子』に関しては、同全集の章段数と見出しも付した。一部句読点・記号を変え、動作主・会話主や訳などを括弧内に補足した。

² 漢字・漢語の使用を控えるべきであるという式部の自己意識は、他人に対しても拡大され、「清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。」（『紫式部日記』<26>p. 202）という、清少納言への批判となって表れている。

³ 検索条件は以下のとおりである。

キー: 語彙素="女"

AND 後方共起: 語彙素="の" ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="身" OR 語彙素="御身") ON 2 WORDS FROM キー

IN subcorpusName="平安-仮名文学" AND core="true"

WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

⁴ 兵部の少輔は人々から「面白の駒」とからかわれており、「顔の見苦しう」と思われる男性である。

⁵ CHJ の検索対象には含まれていないが、「北の方、『なほざりなる御心かな。なほいみじきものは女の身なりけり。かう思ひはてられぬるにこそはあめれ（＝このように愛情がなくなり見捨てられてしまったのだろう）。…』とて、」（『うつほ物語』<14> p. 249）という例もある。

⁶ CHJ「平安時代編」の「平安-仮名文学」の作品中、「男の身」はこの1例のみ。

⁷ 「…はかもなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはんことも難し、五つの何がしもなほうしろめたきを…」(『源氏物語』<24>p.24)の下線部が「五障」にあたる。

⁸ この文脈では、特に、男女の愛執。

⁹ 「発言の中で特に待遇が低くきびしいのは、そのときの発言者の感情の起伏の烈しさ、激昂ぶりと密接な関係を持つとみるのが妥当であろう」(同書、p. 43)。

¹⁰ 「歌」のカテゴリーも発言として扱い、会話文の分析に含めるとこととする。

¹¹ 『落窪物語』に、落窪の君が男性の心中を代弁したものが1例、北の方が男性の発言を想像して述べたものが1例あるが、通常の女性の使用とは異なるため本表からは除外した。

¹² 宮地裕(1973: 109)では、「ユーモラスに自卑的な自称をつかった二例」として、「をのこ」と「しもべ」が挙げられているが、特殊なものであるので、調査対象語からは除いた。

¹³ 宮地裕(1973: 104)ではこれも「実名」の例に入れられている。

¹⁴ 2つの例での「右近」は別人である。

¹⁵ 山口仲美(1998b)では、『源氏物語』では「女性の側から、積極的に愛の告白を行ったケースは一例もない」(p.21)とされている。

¹⁶ 「宮仕えをしたことのない、家の人たち。一説、里に下がっている人。」(新編全集、頭注)